

# 反原発 丸木夫妻の怒り

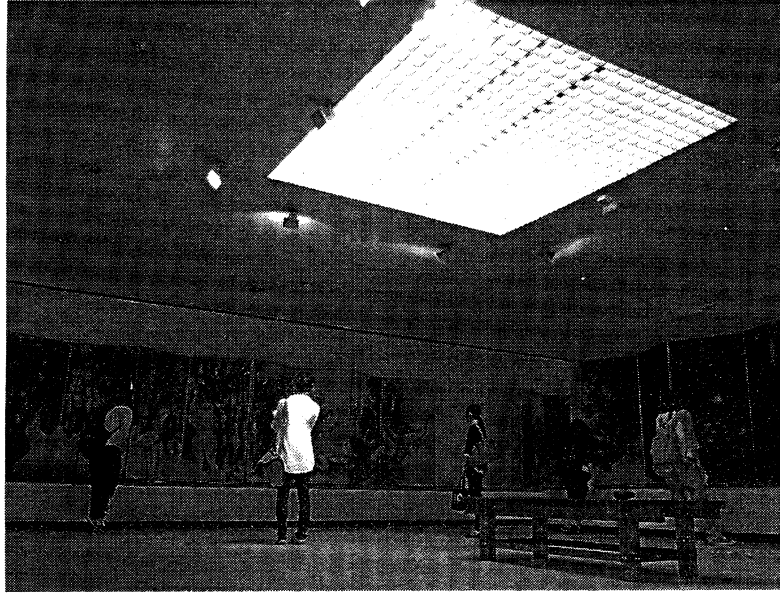
原子爆弾の恐ろしさと核廃絶の願いを込めた「原爆の図」。共同で描いた丸木位里と俊夫妻(いずれも故人)は、反原爆とともに反原発を唱え続けていた。1989年には原発分の電気料金の支払いを拒否し、丸木美術館(東松山市下唐子)への送電を一時的に止めている。後は原発を一ゆっくの燃える原爆」と表現し、原発事故の不安や放射能の恐ろしさを強く訴えていた。深刻な事態が続く東京電力福島第1原発。福島の実状を知れば、丸木夫妻は怒り、嘆き悲しむだろう。

(杉野孝)

■残されたメッセージ  
いと原発に殺される」を連載して後は89年の機関紙「丸木美術館 いた。夫妻は同年、原発建設予定地「ニューズ」に、手記「原発止めな 地の石川県能登地方を訪問。手記

## 電気料金拒否、送電停止も

## 思い継ぐ



「原爆の図」が展示されている。暗い展示室。天井の高さから自然光が入り、明かりは極力抑えられている。東松山市下唐子の丸木美術館

には(美しい海。汚染されていない海だ。魚もうまい)。(どこか遠くに住んでる者が投資して、それが利益を手にするの)でしょう。原発で働く労働者や近くに住んでいる人たちの災害は目に見えているのです。(原文のまま)と記している。

原爆が位里の故郷である広島に投下されたから数日後、夫妻は市内に入った。後はその後、腸出血が3カ月続き、やせ細って死にそ

うになったという。〈原爆と原発は、同じ放射能をばらまくものなのです〉〈放射能は目に見えず、匂いも色もないのです。これよりの恐ろしいものはないのです〉と残留放射能の危険性について訴えている。事故の不安も書いていた。〈日本の原発に事故は絶対に起きない、とは言えないでしょう〉原発止めて、安全なエネルギーに変えて下さい」と原発の停止を求めていた。

■福島第2原発がきっかけ  
電気料金の不払いは、89年1月に起きた東電福島第2原発のポンプ損傷事故がきっかけだった。丸木夫妻は同年4月25日、東電の原発設備率から算出した24%分の電気料金の支払いを拒否。東電からの支払い要請に、後は「水力発電と火力発電の分は払う」と答えたという。東電は同年5月12日、美術館への送電を止めた。送電停止は一年以上続き、夫妻は自家発電機で対抗。来場者は裸電球の薄明かりの中で絵を観賞した。

## 東松山の美術館



反原爆と原発を訴えていた丸木位里(右)と俊(丸木美術館提供)

同美術館の学芸員岡村幸吉さん(36)によると、丸木夫妻は美術館を建設したときから、電気を極力使わないことを考えていた。九つある展示室のうち、一階にある二つの展示室以外は天窗が設置され、自然光が入る構造になっている。夫妻の遺志は今も受け継がれており、電気使用量をできるだけ抑えている。岡村さんは「絵を見ることができたのか。子どもたちのことを思うと、私たち大人の責任。俊先生は怒っているだろう」と

自然のままの環境で絵を観賞してほしいと、エアコンも設置されなかった。夏場は都幾川の川風と扇風機でしのぐ。震災後、来場者の理解がよる進み、美術館は今後もエアコンを設置する予定はないとしている。

■大人たちの責任  
「地震と津波は天災だけれど、原発は人災だ。止められなかったことは残念で悔しい」。俊のめい、夫妻の養女の絵本作家丸木ひさ子さん(55)は、俊が福島の事実を知れば、そう言うのではないかと考えている。ひさ子さん自身(36)によると、丸木夫妻は美術館を建設したときから、電気を極力使わないことを考えていた。九つある展示室のうち、一階にある二つの展示室以外は天窗が設置され、自然光が入る構造になっている。夫妻の遺志は今も受け継がれており、電気使用量をできるだけ抑えている。岡村さんは「絵を見ることができたのか。子どもたちのことを思うと、私たち大人の責任。俊先生は怒っているだろう」と

丸木位里(まるき・いり) 1901年、広島県飯室村(現在の広島市)生まれ。日本画家。妻の俊と「原爆の図」などを共同制作。66年に東松山市に移住し、翌年に「原爆の図」丸木美術館を開設した。95年10月、94歳で死去。

丸木俊(まるき・とし) 1912年、北海道秩父別町生まれ。洋画家。41年に位里と結婚。「ひろしまのピカール」などの絵本画家としても知られる。2000年1月、87歳で死去。